



2月卓話 詩の朗読「96歳 柴田トヨさんの詩の世界」

吉田秀子会員

10 数年前のベストセラーになった詩集を読み直して感動したという吉田秀子会員が、他の会員にも是非紹介したいと企画した詩の朗読の会の始まりです。

詩の作者は柴田トヨさん、1911(明治44)年6月生まれで、詩集を出版した当時2010(平成22)年は98歳でした。柴田トヨさんは腰を痛めて趣味の日本舞踊を踊れなくなった時、息子さんに勧められて90を過ぎて一緒に詩作を始められたそうです。

本が出た時は評判となり、私も読んだ記憶がありました。その詩集40篇余りを、吉田会員が心地良い低音で読み上げられ、思わず引き込まれていきました。

日本昔ばなしから「かみそり狐」の一話も読まれました。悪知恵の働く狐に騙されて丸坊主にされた村の衆の、敵討ちのつむりの若い村人が善戦したものの、見事に狐に騙され丸坊主になったという話で、久しぶりにほっこりした民話の世界を体験させてもらいました。

柴田トヨさんは2013年(平成25年)1月に逝去されましたが、吉田会員のお蔭で私たちの心に詩の灯をともす機会をいただいたと思っています。終わり一編を……。 (内藤)



先生に

私を おばあちゃん と呼ばないで

「今日は何曜日?」 「9+9は幾つ」

そんな バカな質問も しないでほしい

「柴田さん 西城八十の詩は 好きですか? 小泉内閣を どう思います?」

こんな質問なら うれしいわ

(株)飛鳥新社発行[くじけないで]より

2月例会報告

今月も眞鍋会員が休みのため体操もお休み、誕生日は山下博会員が1人でしたが、軽快な口調で喜びを語られました。お楽しみの会食ではオードブルが配られ、おしゃべりと舌鼓をうちましたが、今日はいつもより塩分高めだったよう……。

例会に入り、会長挨拶の後、会員卓話、吉田秀子さんの「96歳、柴田トヨさんの詩の世界」です。ベストセラーだった詩集を読み返した吉田さんが感動し、皆さんにも是非と企画されたものです。心地良い低音で読まれる詩は心に沁みました。初めての試みでしたが、皆さんいかがでしたでしょうか。続いて、創立25周年記念の収支報告を会計の藤原会員が行い、今年は役員改選の年に当たるため、植田会長から役員改選についての説明が行われました。委員会報告、同好会の実施などそれぞれ関係者が要領よく周知しました。

今月のショートスピーチは、山下静江会員が松尾芭蕉の唱えた「不易流行」について格調高く話をされた。終わりに全日本プロバス協議会への賛助金を松本幹事長が呼びかけ、クラブの歌を元気よく歌って、早めの散会となりました。(内藤)

委員会報告

企画委員会

3月4日 6名出席

今月から湖月堂での会場が3階の大広間から2階の小部屋に移りました。17時30分からの話し合いでは、3月例会以降の受付及びショートスピーチ担当者を確認したのに続き、4月例会では下関奇術連盟中島賢士氏による手品を楽しむことを最終確認しました。例会場がザ・スティールハウスから湖月堂に移って初の記念すべきイベントです。ご期待ください。

5月以降の例会卓話は、複数の候補を掲げ講師の都合を伺いしながら決めていくことになりました。また、総会が開催される7月例会での30分間会員卓話は、山下静江会員による「健康長寿を目指して」(仮題)に内定しました。(松本)

交流委員会

3月11日 6名出席

今回より会場を湖月堂の3階から2階の個室に移し交流委員会を開きました。懸案の春の花見について先月から続く話し合いをしました。5月のグリーンパークはバラ展があり、500種3000株に及ぶ福岡県最大級のバラ園なので、見ごたえがあるので行くことに決定しました。お楽しみの食事は若松の割烹料理「三笠屋」に決まりました。たくさんの皆さんの参加をお待ちしております。(柴村)

広報委員会

3月10日 4名出席

やっとならぬ寒さも緩み梅の開花が聞かれる頃ではありますが、委員の体調は万全とはいえませんが、今月も出席者は少人数となりました。紙面は花咲く4月、原稿担当、写真担当の確認をしましたが、記事の少ないのが気がかりでトピックス記事は……、見当たりません。続いてつながり3月号の校正に移り、改行や写真の大小、色使いなど活発な意見が出て盛り上がりました。内容の充実は人数に関係ありません。会議の進行もスムーズに進み、早めの解散となりました。(内藤)

同好会報告

ワインを楽しむ会

寒さの和らいだ2月23日18時からリップで、2025年初の145回を数える会を開催。出席者は11名であったが、会員の高齢化により、急激な体調不良は止むを得ないことではあるが、これらを理解してリップマスターが対応して下さることに感謝である。本日の参加者には、世話役の古賀会員の娘と孫娘(学生、鳥取在住)の参加があり、参加者の平均年齢も下がり、会員の皆様とも話して花が咲き楽しい会となった。



本題のワインは、まずフランスブルゴーニュ シャブリ(白)で口を慣らし、次はフランス ボルドーのフルボディ赤、最後は記念すべき145回に相応しく南米チリのクロ・アベルタ(2013年赤)で締め括った。料理はリップ特製のオードブル、魚のタルト、鶏もものコンフィ、デザートでした。(古賀)

歴史文学講座

令和7年最初の講座を2月25日午前10時から、小倉北区生涯学習総合センターで、ゲストを含め8名の参加で開催しました。講師は史学博士廣崎先生で、テーマは「平家に殉じた誠忠の武将・山鹿城主山鹿兵藤次秀遠と壇ノ浦合戦」でした。廣崎先生は、安徳天皇を奉じて都落ちした平家一門の滅亡までの足取りと、平家を水軍で支えた芦屋町の山鹿城主の奮闘ぶりを、当時の豊富なエピソードを交えて生き生きと語っていただきました。

次回は4月22日10時から松本清張記念館で、テーマは「戦国争乱の北九州 宗像大宮司家と山田館の惨劇」です、詳細な資料も配られます。ご参加ください。(松本)



「不易流行を考える」

No.83

山下 静江

「不易流行」とは＝江戸時代の俳句の大家松尾芭蕉の俳諧理念を取り上げた弟子の向井去来の「去来抄」にある「不易を知らざればそれたちがたく、流行を知らざれば風新たならず」からきている。

「不易」とは不変で本質的な物、変えてはならない伝統などのことを言い、「流行」は時代の変化に対応し、新しいものを取り入れることを言う。一見すると矛盾する二つの言葉であるが、「不易」がなければ流行も成り立たず、不易に固執しすぎれば「流行」が見えてこないということで、この二つの調和が大切だということである。

流行を取り入れて本田との合併を取り止めると表明した日産は創業の精神(不易)を尊重したのである。LINE や SNS などの情報(流行)の一方的発信は、「ペンは剣よりも強し」ではなく「ペンは人を殺す」ともいえるのではないかと。一方、プロバスクラブでいえばチャーターメンバーの存在はまことに心強いが、会員数の減少や高齢化に伴って、新しい会の運営についても考えることも必要だという意見もある。この時にこそ、変えるべきものと変えてはいけないものをうまく調和させ、ぬくもりのある会として継続させていきたい。

「不易流行」の漢字がすぐに浮かばなかった。ビジネスの世界ではよく使われる言葉らしい。不易をしっかりと見すえなければ変えるべき流行は見えてこない、見極める力をもたなければならぬ…遅いかもしれないが反省です。山下静江さんでなければ聞けないお話でした。(植田)



2月のお誕生日

おめでとうございます (敬称略)



山下 博 (4日)

3月も出席してね!
待っています

同好会活動報告

食美会

2月28日12時より全員参加(11名)で、魚町銀天街の中にある「竹なか」に集合です。大きな海老のついた刺身定食をいただきました。テーブルは二つに分かれましたが、それぞれの家族のことやおしゃれ情報交換の花が咲き、美味しい食事と少しアルコールも入ってにぎやかで話が尽きません。いや、ノンアルコールでした。今回から神田夫人も参加されています。(吉田秀子)

カラオケの会

2月21日11時30分から、小倉北区の浅野パティオでカラオケを楽しみました。

今回は女性ばかり4名でした。食事をした後、懐かしくバラエティ豊かな昭和の歌、「ここに幸あり」「浪花恋しぐれ」などが飛び出し、有意義な時間を過ごすことが出来ました。会話もたっぷりと楽しんでそれぞれ町中へ。

是非とも男性方の参加をお待ちしています
(安河内)

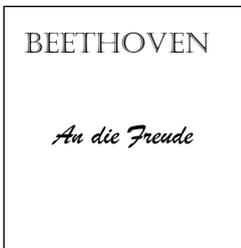


「第九 祭屋話し」

植田佐世子

年末になると何故かベートーヴェン作曲の交響曲第9番「合唱付き」が放送される。日本初演は大正8年6月1日、第一次世界大戦で徳島県鳴門市の板東俘虜収容所のドイツ人捕虜たちの演奏で、一般観客はいませんでした。合唱に学生が参加したのは昭和13年12月、有名な指揮者ローゼンシュトックが現在の国立(くにたち)音楽大学と玉川学園の学生を起用したのが始まりです。年末の演奏に至る諸事情は此处では多くを語らないことにします。

私が学生であった1970年代、某公共放送局のテレビに出る100名程度の合唱団員の席を獲得するのは一大事件でした。声楽科の学生は無条件で出演できるのに、帰宅組が大勢いました。「男声」がなければ混声合唱にならないので男子学生は優先的に出演可能。あとは努力で突破するしかない狭き門でした。なぜ帰宅組？だって声楽科専攻のプライドが…、だって年の瀬の練習に継ぐ練習では九州に帰る汽車の切符がとれなくなる。だってポンッとアップで抜かれる人は美人ばかり、きっと私はどこにいるかも判らないまま曲が終わる。いや！ただ剥れているわけではない、この曲には問題点が多いのです。



まず演奏時間が異常に長い。第1楽章16分、第2楽章12分、第3楽章17分、第4楽章にいたっては前奏6分合唱17分、平均して70分かかる。そればかりか頭の固い指揮者は最後の17分のために来ている合唱団員を第一楽章から立たせる。あの強烈なライトの下、53分間も立っただけは生き地獄。暇で暇で隠れて本を読みながら出番を待っている打楽器奏者をののしりたくなります。ヤサシイ指揮者は4楽章で「立て」の合図をくれますが、6分後かっこよく歌い始めるのはバリトンのソリストで、ソプラノに至っては約300小節待たなければならず、まるでお預けを食らった犬です。

私は卒業してから散々「第9」を歌いましたが、合唱団の悲劇はまだまだ続きます。あまり大きくないホールで演奏する時、コーラス全員が入れる楽屋があるはずもなく、暮の寒空の下、外の吹き曝しのテントで着替えをしなければならないこともありました。また第1楽章から立たされていたソプラノのメンバーが、貧血を起こし隣の人を掴んだままひな壇から落ちた！ 幸い4楽章には復帰しましたが。さらに演奏中にテノールの一部が静かに姿を消したこともあります。総体重を読み違えたか、鉄骨組みのひな壇の鉄骨部分が折れたため平らになってしまったのです。合唱団員は沈んでも歌い続けましたが…。

次に問題なのがドイツ語。「フロイデ シェーネル ゲッテルフンケン…」Rの発音やドイツ語独特のウムラウト標記を発音するのは厄介。しかし合唱はごまかせるし、暗譜を強制されることもありません。

まあ、これらのハプニングや不満も「交響曲 第9番 合唱付き」の100/1の合唱団員に選ばれると何故か心躍る…ベートーヴェンさん“おそるべし”

ありがとう BOX メッセージ2月分 (入会順、敬称略)

★今日も元気に例会参加出来ました(遠藤) ★極寒の中、皆様に元気でお会いでき感謝です(古賀) ★久しぶりで会合に出られてうれしいです(山下博) ★今日も1日元気に参加できました。感謝(吉田秀子) ★(松本) ★(植田) ★今年の寒波はひどすぎる(吉田信雄) ★(安高) ★朗読の声がとても心地よかったです！(橋本) ★寒さに負けず春を迎えましょう(柴村) ★梅が咲きはじめ春はそこまで来ています(藤原) ★ショートスピーチを聞いて頂きありがとうございます(山下静江)

収支報告	令和7年1月末残高	44,773円
	令和7年2月分	6,000円
	令和7年2月末残高	50,773円